



## ヤクシカと折り合いをつけた森

小原比呂志

今、日本各地でニホンジカが増え、生態系に危機的な影響を与えている。

丹沢のブナ林はブナの稚樹がシカに食われて後継木が減少したため衰退しつつある。シカの食害を受けた地域ではおいしい植物は食い尽くされ、シカの嫌う有毒植物やトゲ植物が増える。

大台ヶ原や南アルプスでは、林床を覆っていたスズタケの大群落がシカに食い尽くされ、見通しのいいすっきりした森に変わってしまった。林床植生が消失すると、土壌が流失して木々の根が洗い出され、根返りを起こしやすくなり、土砂崩れを誘発し始めるともいわれる。

シカはいったん増えると普段食べないものも食べるようになり、こういった被害を取り返しのつかないところまで進行させてしまうというのである。

ところでこれらの「不可逆的」とまでいわれる状況は、面白いことに屋久島の森の特徴によく似ている。

屋久島にはブナはなく、林床にはアセビやシキミ、マムシグサ、ハイノキ、ツツジ類など有毒植物が多いし、ヤクスギの稚樹やヤクシマアザミのトゲトゲしさは全国でもトップクラスだ。そしてブナ林や温帯針葉樹林にはつきものといっけいスズタケの群落もない。土壌は流失し常に薄く、谷筋では土石流が起こりやすい。そしてヤクシカは、シキミやツツジ類など有毒植

物もけっこう平気で食べてしまう。

いかがだろうか？ よそでは「不可逆的な危機」といわれる事態が、屋久島の極相林ではごく安定した特徴なのである。

また屋久島には花崗岩塊や大木の幹などの小高い基物が多く、ナナカマドやオオタニワタリのようにほとんど着生専門で生育しているものも多い。ヤクシマリンドウなどの貴重な固有種も、手の届かないような花崗岩のクラックに生育している。これらは光との関係で説明されることが多いが、実はヤクシカの虎口を逃れ、着生という避難場所を見出しているのかもしれない。

7300年前の鬼界カルデラの噴火で、屋久島は破局的な被害を受けた。その荒廃のなかで生き残った植物たちは、島外からの来訪者を少しずつ加え、やはり生き残ったであろうヤクシカの食圧と折り合いを続けながら、森林を復活させてきたはずである。

そう考えると屋久島の生態系では植物とシカとの間で平衡状態が成立しているという考えが成り立つのではないだろうか。屋久島ではシカの食圧は「害悪」ではなく「環境」なのである。屋久島の自然史を考えるとき、忘れてはいけない背景だと思える。

ガチンコ勝負！?

# 山の料理対決

櫻村精一 VS 佐藤崇之

～キャンプに行ったら何食べる？～

YNACでは、ツアー中に様々な飲み物、食べ物を作る。カヤックツアーなら「焚き火ウインナー」「焼きソバ」「屋久島銘水うどん」。シーカヤックやダイビングなら「いそもん風味屋久島ラーメン」など。ツアー中の軽食には「種子島牛乳チャイ」「屋久島名物ぐあば茶」「季節のフルーツ」など。こういう「もてなし」にも、目的がある。

## 安い・早い・美味・滋養強壮・レトルト禁止

ひとつは四季折々の屋久島産物を織り交ぜた独自料理をお客様の目の前で作り、その時間さえも思い出しに頂くこと。もうひとつは、地域特産物を味わう事によって、エコツアーを屋久島農産物の消費拡大と宣伝につなげる事。この2点をもって、YNACでは「レトルト食品は極力使わない」という方針を貫いてきた。

今年、櫻村・佐藤の両名は宿泊登山担当の男子スタッフとして仕事に出る機会が増えた。何も無い山の中では、コップ一杯の水さえも貴重。ましてや「料理」が持つ価値と役割は計り知れず、宿泊登山ではやはりこれがメインイベントといえる。ここで失敗するわけにはイカン。この時間がガイドにとっては最も緊張する時間であり、「見せ所」でもあり、故に最も力の入る所なので、「自分達の料理はイケてるのか？」を確認しようか、ということ。二人の料理を実際に社内で吟味し、今後のステップアップに役立てよう、というのが今回の企画である。

## 『やまめし』のルール

山小屋のお楽しみは、みんなで食べる夜の食事だ。苦勞して荷揚げしたザックの中に詰め込まれた酒と食料。さあ、どうやって食べよう？自然の中で食べる食事は最高の贅沢。山小屋到着の達成感も手伝って、ここでは何を食べてもうまい。ただ、山小屋で食べる「食事のもの」が、更に美味しいものであれば、なお幸せだ。ろうそくの光の下、山小屋で食べる食事。佐藤はこれを『やまめし』と呼ぶ。

やまめし作りには制限が多い。山小屋には、家庭のキッチンとは違って冷蔵庫も電子レンジもない。ましてや洗い場もないので、食器は水で洗わず、紙で汚れをふき取るしかない。

そして、食材を担ぐのは我々自身である。軽量

化も考えると、使える食材や道具は、軽くて丈夫なものばかりで、メニューも片付けやすいものに限られてくる。

この制限をクリアしようとする、運べる調理器具はせいぜい次のようになる。(写真)

- ・鍋(大・中・小の3つ、重ねて一つに納める)
- ・フライパン ひとつ
- ・ガスコンロ アウトドア用2つ程度
- ・ナイフ・おたま・しゃもじ等



食材にも制限がかかる。山には冷蔵庫は無いので、基本的に保冷を必要とせず、持ち運びの楽な、軽い食品をよく使う。肉類などは前もって塩や味噌で揉んだり火を通しておく。野菜は傷みにくい根菜類となる。

そして、なんといっても使い勝手のいいのが「サバ節」である。



屋久島沿海は古来、カツオの好漁場で、江戸時代には、紀伊半島や高知からカツオ漁に来る船もあった。屋久島のカツオ節製造技術はその頃の日本のトップレベルだったが、明治以後、機械化の遅れた屋久島のカツオ漁は衰退してしまい、漁獲量は激減。今ではカツオの代わりにサバを獲り、「サバ節」を作っている。上の写真・左は、スーパーの鮮魚コーナーで買える1本150円程度のサバ節。右は土産用の真空パックで、1本250円程度。どちらも「なまり節(=スモーク)」である。

本枯れにした屋久島のサバ節は、東京の蕎麦

屋ではダシ作りに使われる。櫻村は「おでんダシ」に枯れ節を使うが、甘くて美味しいダシが出る。

## 食材の保存と運搬について

では、どう運べば、食材を潰さず、腐らせずに山小屋に到着できるのか？肉・野菜・タマゴの運搬方法を紹介します。

まず肉類。

- 凍らせる
- 塩コショウ・香辛料をまぶす
- 味噌漬け

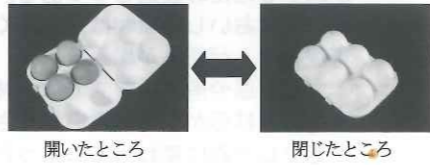
などがあり、基本的にはすぐ調理できるように切りつけた後、ラップに包んでタッパに押し込む。刻んだショウガやニンニクを混ぜると、味も良くなるので、常套手段である。

次に野菜について。

a. トマトなど、柔らかいものは鍋に入れて運ぶ。キャベツやレタスなども、何かに圧迫された部分は腐るので、ラップして鍋に入れる。

b. タマネギ・にんじん・イモ類は、そのまま運び、現地できれいな水で洗う。現場で生ゴミが出るが、保存上この手間は省けない。

タマゴは、生卵を潰さず運べるケースがあるのだ(下写真・6個入りで350円ぐらい)。だが、このケースも長年使うと関節部分が弱り、タマゴが壊れてしまう。5年もてば良いだろうか。



タマゴは非常に便利で、なんでもとにかく卵と同じにして、ご飯にかければ立派なドブルリに変身するし、朝のおじやにも欠かせない。キャンプ料理の必需食材なのだ。

## 二人のオリジナルメニューは？～櫻村編～

櫻村は、基本的に

- 前菜とお酒
  - ご飯とおかず(汁物はあまり作らない)
  - 乾き物と食後のお酒
- という食事の流れがある。乾き物は、スルメやナッツ類など、作るものではないので、「前菜」と「おかず」のメニューを紹介する。

## 前菜・鶏肉ネギ炒め

最も頻繁に出してしまう。文字どおり、鶏肉と白ネギを黒砂糖と醤油で炒めたもの。このコーナー後編で詳細を述べております。ニンニクの芽や、ゴキウヤを入れても美味しい。



## 前菜・牛タン塩焼き

入社後、初めて縄文杉一泊ツアーに同行した時に、市川取締役にご飯を任されて作った前菜だが、あまりにハイコストな為以後封印された。このときのお客さんは新婚さんで、山でおしゃれに牛タンとワインなど召し上がっていただこうかと考えたのだが、会社の財布の中身を全く考えなかったという、今思えば幼稚なアイデアのメニューである。単純に、牛タンをごま油と塩コショウで焼くだけの手軽さだが、あんなに美味しいものとは思わなかった。いつか会社の財布が豊かになったら、定番メニューにしてみたい。

## 前菜・牛ホルモン甘辛炒め

もうお気づきでしょうが、要するに前菜というのはお酒のアテなのです。居酒屋さんに行けばパッと出てくるようなものだが、できたての温かいのが山で出てくれば、これほど嬉しいこともない。材料は牛ホルモン(大腸が私の好み)とタマネギ。ツアー前日からタマネギを刻んでホルモンと混ぜ合わせ、塩コショウを効かせて冷凍すれば、調理する頃にイイ感じになっている。10分も炒めれば立派なものが出る。

## おかず・ブタ味噌どんぶり

宮之浦郵便局向かいの塚田精肉店で、豚バラのブロックを買い(三枚肉でもよい)、これを5mm厚ぐらいにスライスして味噌を塗り、タッパに入れて冷凍庫へ。翌日には、移動中に自然解凍され、味噌の効果で、程よく柔らかくなっている。炒めても硬くならない。玉ネギを刻み、混ぜ合わせて炒め、ご飯に乗せれば出来上がり。肉が余れば、翌朝のおじやに入れる。

味噌というのは、コウジカビが大豆のタンパク質や脂肪、デンプンなどを程よく分解して出来るものである。肉に味噌を塗れば、このカビが肉にも作用して、脂肪やタンパク質がほどよく分解された、柔らかい肉ができる。この過程を「熟成」という。タンパク質は分解されるとアミノ酸になるが、「味の素」で有名な「旨味成分グルタミン酸」も、疲労回復

に効果的な「BCAA」も、みんなアミノ酸の一種なのである。熟成肉は、食べればウマイし、疲労回復にも効果的なのだ。ちなみに、放っておいても、肉は柔らかくなるが、これは肉自身が持つ消化酵素が自分自身を溶かすのである。この間に変な微生物がつくと腐敗が始まるが、味噌を塗れば、なんとコウジカビが腐敗菌を駆除してくれる。

防腐効果も備えた味噌塗豚肉、甘くて美味しい黒豚はビタミンB たっぷりで、疲労回復の決め手にも。使わない手はありませんよ。

## おかず・豆のトマトソース風煮物

滋養といえば「豆」。軽いので運びやすく、繊維質も多い。買い物に行くとき種類いろいろは豆を買ってしまおう。ガルバンゾ(ヒヨコ豆)を買って「ガンバルゴ～」などと言いながら料理をするが、イマイチ盛り上がりがない。ホールトマト缶・鶏肉・豆を使い10分ほど煮込んだ後、ブラックペッパーと岩塩でワイルドに仕上げる。(味付けは「良い加減」にやる)菌ごたえがあってナカナカよい。「とろけるチーズ」をあんと乗せると、更にかっこよく仕上がる。

## 二人のオリジナルメニューは？～佐藤編～

佐藤の夕食は「暖かい」「お腹一杯」が基本である。そのためにのおかずと汁物やとろみのあるものが多くなる。よく作るものを挙げてみた。

## 屋久島風豚汁

屋久島産のサバ節と鹿児島産の黒豚を使った佐藤のイチオシ。

サバ節は屋久島の随一の名産品。「ダシ」にも「具」にもなるという、最も使い勝手のよい食材。半身にした「茹でサバ」を、広葉樹で燻したスモークで、柔らかく、甘味のあるダシがでる。カチカチの鯉節のような「本枯れ節」もあるが、我々は、柔らかい「なまり節」タイプを使う。このダシで野菜と鹿児島黒豚を煮込み、味噌で味を調える。

まず、黒豚の三枚肉のブロックを1cm幅で切り、油を使わず、鍋に入れ弱火で焼くと、豚の油がじんわりと出てくる。これだけでご飯が何杯も食べられそうほどの香ばしい匂いがたちこめてくるが、我慢して両面を焦げ目がつくまで焼く。その後、サバ節を一口大にちぎり、水と、切っておいた野菜と一緒に煮る。野菜に火が通ったらアクを取り、最後に味噌で味を調えて完成である。

## 屋久島風 麻婆春雨ナス

やはりサバ節を使ったメニュー。お気づきかと思うが、サバ節のいい所は、使い勝手だけではなく、入れるだけで、どんなメニューも「屋久島風です」と胸を張って言えるのだ。

これは、茄子・ニラ・ネギを使ったボリュームたっぷりのメニュー。特にニラやネギは体を温めてくれるので、寒い時期の定番である。また、軽くて持ち運びに優れる「春雨」はありがたい食材。そして、

荷物を軽くすれば、もう一品メニューを増やせるのだ。(つまり、結局何をやっても荷物は重いのである。食べたい物がいろいろ多いからね。)

鍋に水を張り、野菜・サバ節を煮込んで味をしみ込ませる。そこに春雨を入れ、市販の麻婆茄子の素(これはレトルトか?)をいれるだけ。とても簡単である。大人数でも一度に対処できるし、何より材料が軽くてよい。

## 屋久島風パスタ

しつこいようだがやっぱりサバ節を使う。が、佐藤はこれが一番得意であり、普段、家でもよく作る。嫁も気に入っているようだ。

ペペロンチーノ風の Pasta で、サバ節と、たっぷりの野菜を使う。味付けはニンニクと塩・コショウのみ。とてもシンプルな味付けだが、ポイントはパスタの茹で方にある。パスタは塩を多めに入れた熱湯で、芯を残さず茹で上げるのだが、山では火力に制限がある。風の強い日には火が安定せず、湯の温度が上がらないので必ず風除けをした場所。また、塩分濃度の高い茹で汁を森に捨てるわけにはいかないので、茹で始めからいきなり塩は使えない。よって、アルデンテを狙おうとすると、途端に難しい料理になってしまう。

しかし、手順はいたって簡単。まずパスタを茹でる。同時に、にんにく・サバ節をフライパンに入れて、油で温めておく。そして、茹で上がる直前、まだ芯がある状態のパスタをフライパンに入れ、そこにゆで汁を少々と塩を入れて、フライパンの中でアルデンテを目指すのだ(これが非常に難しい)。水分がなくなってきた頃に野菜を入れ、余熱で火を通せば完成。ここで、野菜に火が通りすぎると、菌ごたえの無いパスタになってしまう。簡単な手順ながら、奥深い技術を必要とする「やまめし」Pasta、実は滅多にお目にかかれないレアメニュー。これに当たったお客さまは、かなりのラッキーパーソンだ。



新高塚小屋にて、ナスを炒める佐藤

### 実際に対決してみました

2007年6月30日は、「山の神祭り」の日。かつて林業関係者は、この日を「神様が山の様子を見てまわる日である」として、山仕事をしない日にした。

我々ガイドも山に入る者としてこの日を特別視し、ツアーには出ず、海浜清掃や勉強会などに当てている。今回は海浜清掃の日であり、朝から一湊海岸のゴミを回収して(ハイエース2台分!)腹ペコになったスタッフ達が、佐藤・櫻村の作る料理に様々な評価を与えるべく、お昼時に帰ってきた。二人のキャンプ料理を食べるのは、実は初めてののだ、というスタッフ達が、やや「期待してますよ」的な雰囲気をかもし出しつつ事務所内に待機している。

料理開始時間は12:00とし、10人前を作り、完成までの時間・見た目・屋久島らしさ・味・栄養バランス・ゴミの量などを基準に評価をしてみた。まず総重量では櫻村、原料費では佐藤に、それぞれ評価が与えられている。

#### 料理人・櫻村精一 鶏肉ネギ炒め&ブタ味噌どんぶり



##### ★材料

- ブタバラ肉・682g(ビタミン補給の王道)
- トリ胸肉・426g(皮付きで味よし)
- 玉ネギ2個・360g(血液をサラサラに)
- 白ネギ3本・322g(鶏肉といえはコレ)
- ゴーヤ 1/2 本・134g(女性に大人気)
- ⇒ 合計重量 1924g

##### ★調味料

- 黒砂糖(疲れた体に糖とビタミン)
- ごま油(食欲を掻き立てる最高の香り)
- コンパだし醤油(甘くて美味しい炒め物に)
- 味噌・豆板醤(前日のうちにブタ肉に塗る)
- 岩塩・コショウ(味の決め手、最後はコレ)
- 原材料費 ¥1500-

鶏肉(皮がついていれば、モモでもムネでも構わない)は、前日から塩コショウ、さらに冷凍したものを、自然解凍して使う。ごま油で鶏を炒めたら、黒糖と醤油をフライパンに入れて「良い加減」に味付けし、ネギ・ゴーヤを入れて強火でガーッと仕上げる。すると、事務所内にごま油と鶏皮油の良い匂いが立ち込め、評価員たちがざわめきだす。宿泊登山では、食卓のワクワク感もエンターテイメントの一つだ。ブタ味噌どんぶりはとても簡単。味噌漬けた豚肉をそのままフライパンで焼き、刻んだ玉ネギを混ぜるだけ。玉ネギ一個で5人前は作れる。このときに玉ネギの皮など、生ゴミ80gが出たが、発生したゴミはそれだけであった。



事務所台所にて、作業を始めた二人

#### 料理人・佐藤崇之 屋久島豚汁



##### ★材料

- ブタ肉/バラ スライス・342g
- 大根と人参・704g(消化を助け、目にもいい)
- ネギ・322g(和風汁には、絶対外せない)
- エノキとシメジ・218g(最軽量食材、繊維豊富)
- サバ節・150g(屋久島テイストに不可欠)

- 味噌・330g(赤よりも白よりも、麦味噌だ)
- ⇒ 合計重量 2066g

##### ★調味料

- サバ節と味噌が、既に調味料になっている。
- サバ節の小さな骨を抜いておくと、なお良い。
- 原材料費 ¥1200-

屋久島豚汁は、まず材料を切り、次に鍋で肉を炒め、そのまま水を入れて煮る。材料を投入し、大根が食べごろになったら味噌を入れ、しばらく待つ。……というだけの簡単料理で、10人前ぐらいまでなら、上の写真のように、金鍋いっぱいでも20分もかからず完成する。手間いらずな感じで結構美味しいものが出来る、しかもたっぷり。というのがこの料理のずば抜けた長所である。そして、日本人の心を強く揺さぶる「とんじる」という響き。この、「やさしく暖かい雰囲気」に人は惹かれるのだろうか。

市川取締役は、「楽しいから毎月やればよい」と、真剣に味わって食べている。ほっとする櫻村・佐藤。しかしなんと、彼はゴーヤが苦手だったのだ。開始直前に、思いつきで炒め物にゴーヤを混ぜてし



審議中、減多に無いイベントに真剣さを隠せない

- またた櫻村は、思わぬ減点を喰らうはめに。慌ててビールを勧めるも、時すでに遅し。
- 食後、5つの項目で今回の料理を評価した。
- a. 喜び ⇒ 見た目・意外性・屋久島らしさ
- b. 味 ⇒ 食事中の満足度、味を評価
- c. 満足 ⇒ 栄養バランス・ボリューム感
- d. 作り易さ ⇒ 調理時間・手間
- e. ムダの無さ ⇒ ゴミの量・総重量

各評価員のコメントからは、調理人を気遣うやさしさが満ち溢れていた。褒められた点は、  
櫻村:肉がでかくてイイ。ゴマ油の香りがよい。調味料が多様でよい。2品出るのがよい。  
佐藤:具が多く見た目がよい。野菜が多くて、ほっ

とする。栄養バランスがよさそう。サバだしが美味しい。片付けがラク。汁物が嬉しい。  
など、味や見た目などは文句なしである。では反対に改善点を挙げよう。  
櫻村:肉ばかりである。女性には味が濃い。油っぽくて片付けが大変。野菜が少ない。  
佐藤:普通すぎて意外性が無い。もう一品欲しい。具が大きすぎる。

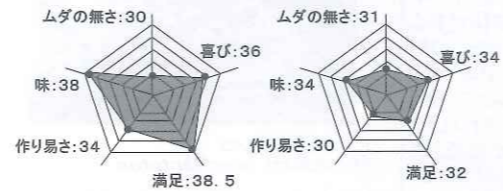
など、櫻村は食材にバランスを欠き、佐藤は調理がやや大雑把、という問題点が浮かんた。今回の評価員は男性3名、女性5名で、まず「栄養バランス・野菜の量と質」、そして「準備と片付けの時間」が評価の分かれ目となった。

### 二人の料理はどうだったのか

佐藤・櫻村共に、まず準備と片付けに気を使っている。使う道具を極限まで減らし、調理から片付けの間・時間もできるだけ省略した簡単料理の代表が今回のメニューとなった。

軽量化と下拵えでゴミを減らし、絶対に食中毒のないように防腐と加熱に気を使い、味をうまく調える。時間と材料を制限した中で、今回の二人の料理は、以下のように評価された。

佐藤崇之:176.5p 櫻村精一:161.0p



佐藤の勝ち! (社長も嬉しそう)

本原稿の作成中、事務所での評価対決を終えた後にも、櫻村・佐藤両名のガイドによる縦走ツアーがあった。入社以来、2年以上の縦走経験をもって、練りこんで身につけた料理は、今回もお客さまを満足させるのに成功した。この企画で試した「鶏肉ネギ炒め」と「屋久島豚汁」を提供し、8合の米を炊いたのだが、お客さま総勢6名のうち、5名が女性(写真下)であったにもかかわらず、残り物が全く発生せず、翌朝出発時に櫻村・佐藤の両名は空きっ腹を抱えてしまったのだ。これをもって我々は、更に自分のスキルに自信を持つに至ったのだった。

今回のツアーで、一つ勉強になったのは、「最終的にはカレー一味」ということである。



鶏肉炒めの材料に、「塩コショウの鶏肉」と、「カレーパウダーとクミンの鶏肉、ニンニク・ショウガ混じり」の二つを用意し、まず塩コショウ味、次にカレー味の順で作ってみたら、味を変えただけでいくらでも食べられた。順番としては「塩」→「醤油」→

「味噌」→「カレー」であろうか。鍋物などのときに試せると思う。これはYNAO教育部長・小原比呂志も認めている。(しかし、カレーに関しては後述の問題あり。)

翌朝、ネギ・ジャガイモ・ニンジン煮て前日の冷や御飯を入れ、味噌・だし昆布・鯉削り節・サバ節を混ぜ込み、朝食のおじやにする。これにゴマ油を垂らし、梅干・漬物を添えれば立派な「日本の朝ごはん」。その他の料理にも、黒砂糖・醤油・昆布・ニンニク・ショウガなどのちよつとした調味料は、もはや不可欠。櫻村の普段の一人暮らしの朝食の方が、よっぽどダラシナク見える。

### キャンプ料理は、何が大切なんだろう

#### 佐藤曰く～その1 栄養!

夜はご飯とレトルトカレー、朝はお湯かけのアルファ米の五目御飯。お昼は菓子パンをかじって簡単に済まし、おやつはチョコレートとキャンディー。山に行くところな、炭水化物中心の食事になりがちではないだろうか? 山登りはエネルギーをとんでも多く使うので、炭水化物は欠かせない。が、それ以外にも汗で失われたミネラル・ビタミンを補給しないと体が動かない。1日や2日の山登りでも栄養はしっかりと補いたい。体に栄養を補給し、元気に歩ける状態に整える事が山の食事の基本。だから、野菜もお肉もしっかり持っていくのだ。

#### その2 持ち運びやすさ!

なんといっても軽い食材を選ぶのがポイントで、乾燥食品、軽い野菜(キノコ等)などがよい。屋久島では、水はたくさんあるので、大根など(重量の94%が水分!)は避けたい。ほとんど水を運んでいるようなもので、使うときは程々にしたい。しかし、軽いもの中心に考えると、使える食材が制限され、メニューの幅がせまくなる。つまりは、食べたメニューと、体力に合わせた重量のバランスが大切なのだ。

#### その3 ゴミを出さない!

これも軽量化の重要な工夫である。山で出たゴミは持ち帰らないといけない。特に食事に関係するゴミ。皮ごと食べられる食材は皮を剥かずに食べ、食べ残さないように適量を持っていく。たとえ料理が余っても、全て腹に収められるように、普段から胃を鍛える。このように装備・肉体の両方に気をつけて、はじめて山のゴミはグッと減る。

#### その4 後片付け!

山では洗剤で食器を洗えない。水系の汚染を防ぐ為である。だから、油っこい料理の片付けは大変な手間がかかる。よって、煮物・鍋物が最適のキャンプ料理となる。フライパンに油を引く程度ならまだしも、うっかりカレーライスなど作ろうなら、鍋や食器にしみついたカレーの臭いが、下山



にこやかに御飯を盛ってくれるお客さま

までザックから漏れ続ける。これにはもうウンザリさせられる。

### ツアーにおける食事の意味とは

宿泊登山で身にしみて分かるのは、食事こそが命の源であるということ。食事は、歩き疲れたツアー参加者の心を和ませ、楽しい思い出を作るための重要な手段であり、肉体を回復させ、明日へと向かわせる為の必需品でもある。お酒も、飲みすぎなければこれほど愉快なものはない。一夜の仲間の「和」を醸し、より多くを語らうために、お酒は不可欠だ。

ゆえに、我々はビタミン・ミネラル・糖分などをバランスよく消化・補給できる食事を作り、お酒を添えてお客さんに提供しよう心がけている。(レトルトを使わないのは、レトルトを作るために必要なエネルギーが非常に大きいからである。自分で作ったほうがエネルギー消費はずっと少なくて済む。だいたい、得体の知れない材料を使われても外見では分からない。)

しかし、これは山に限ったことではない。普段の生活からして「食事」とはそういうものである。屋久島のガイドには、「縄文戦士」と呼ばれる、縄文杉へのガイド業を日々の糧にする屈強な男たちが沢山いるが、彼らの中にもメタボリック症候群と診断される人がいる。メタボリックの患者に対し、医者の意見は大体いつも同じ、「もっと日頃から歩いて下さい」。ほとんど毎日20km以上歩いている彼らに、これ以上どうやって歩けというのか。食生活の習慣が如何に怖ろしいかを物語るエピソードである。

健康登山などという前に、その一本のビール、一切れの肉を抑え、普段から「バランス」と「腹八分」を心がけたいものだ。

参考文献:「もやしもん」石川雅之・著 講談社

屋久島の最北端、矢筈岬の西側、一湊漁港に「タンク下」と呼んでいるダイビングポイントがある。このポイントは、赤灯台の堤防と岩礁の先端を結ぶ狭い三角のエリアが港の堤防のすぐ横にありながら特異な環境を作り上げている。港の拡張工事の計画が持ち上がったとき、ここに生育するオオハナガタサンゴの群落は日本最大級と分かり、工事の計画が廃案になったことがある。また、これまでいろいろな研究者がこのポイントで調査を行ったが、口々に絶賛の声をあげたポイントである。

その岩礁域から湾内中央へは砂地へと変わるのだが、岩礁から50mほど砂地を東に行くと小さな岩がある。そこが今回対象とした「小パッチ」である。南北に5m東西に2.5mほどの小さな岩であるが、周りの岩礁域にはない独特の空間を作り出している。

この小パッチには、テンジクダイの仲間が沢山群れているが、特に珍しいのは他では見られないスカシテンジクダイが付いている。また、ハナダイの仲間では、やはり他では見られないカシワハナダイやケラマハナダイが付いている。

大型のユカタハタやドクウツボを頂点に、この小さな岩の周りだけで、一つの生態系が作り出されていて、この小パッチは、サンゴ礁域に見られる「パッチリーフ」の環境となっている。



イシサンゴ類

サンゴ類は、どの群体も小さく、あまり安定した環境ではないようである。11科29種類を確認したが、小さな群体が多く、同定できないものがたくさんあった。映像のみの同定では困難で特徴がはっきりしたものしか同定できなかったため、種類としてはまだ数種はあるものと思われる。種子島で約150種のサンゴが確認されているが、その5分の1にあたるサンゴがこの小パッチで見ることができることになる。不安定な環境が多様性を生み出している。



1 ウスカミサンゴ *Mycedium elephantotus*

比較的にこの海域にはたくさんある。20cmほどの小さな群体が多い。



2 キッカサンゴ *Echinophyllia aspera*

大きな葉状になるが、ここでは小さな10cmほどの群体しかない。



3 オオトゲキクメイシ *Acanthastrea rotundiflora*

褐色の群体が多いが、この群体は赤みを帯びた群体。



4 ダイノウサンゴ *Symphyllia radians*

他の場所では大きな群体を見かけるが、この群体は30cm程度の小さな群体。



5 ハナガタサンゴ *Symphyllia valencienjensis*

ダイノウサンゴ幼体である気もするが、隔壁に鋸歯を持つ点で本種と判断。



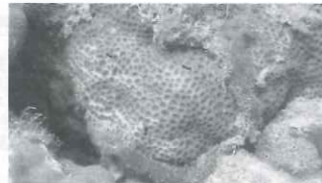
6 オオカメコキクメイシ *Favites flexuosa*

熱帯から温帯にまで分布している。屋久島でも普通に見られる。



7 カメコキクメイシ *Favites abdita*

まだ付いたばかりの小さな群体。



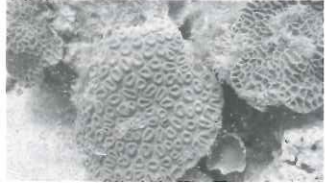
8 シナキクメイシ *Favites chinensis*

潮溜まりのような浅い海域に多いようだが、ここはやや深め。



9 マルカメコキクメイシ *Favites halicora*

この種はあまり大きな群体は作らない。10cm程度の群体。熱帯性。



10 アバレキクメイシ *Favia veroni*

一個体が大きくはっきりしていて、見分けができる。



11 キクメイシ *Favia speciosa*

温帯域にも普通に見られるサンゴ。ポリプは大きい。



12 タバネサンゴ *Favia tumida*

サンゴ個体が枝状に飛び出すので見分けられる。温帯域のサンゴ。



13 リザードキクメイシ *Favia lizardensis*

球状に発達し、赤味がかることが多い。



14 パリカメコキクメイシ ? *Goniastrea aspera* ?

まだら模様になっているものが多い。普通に見られる。



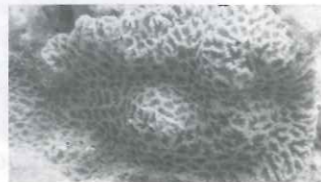
15 ヒメウネカメコキクメイシ *Goniastrea favulus*

サンゴ個体が、一個から数個まで不規則である。



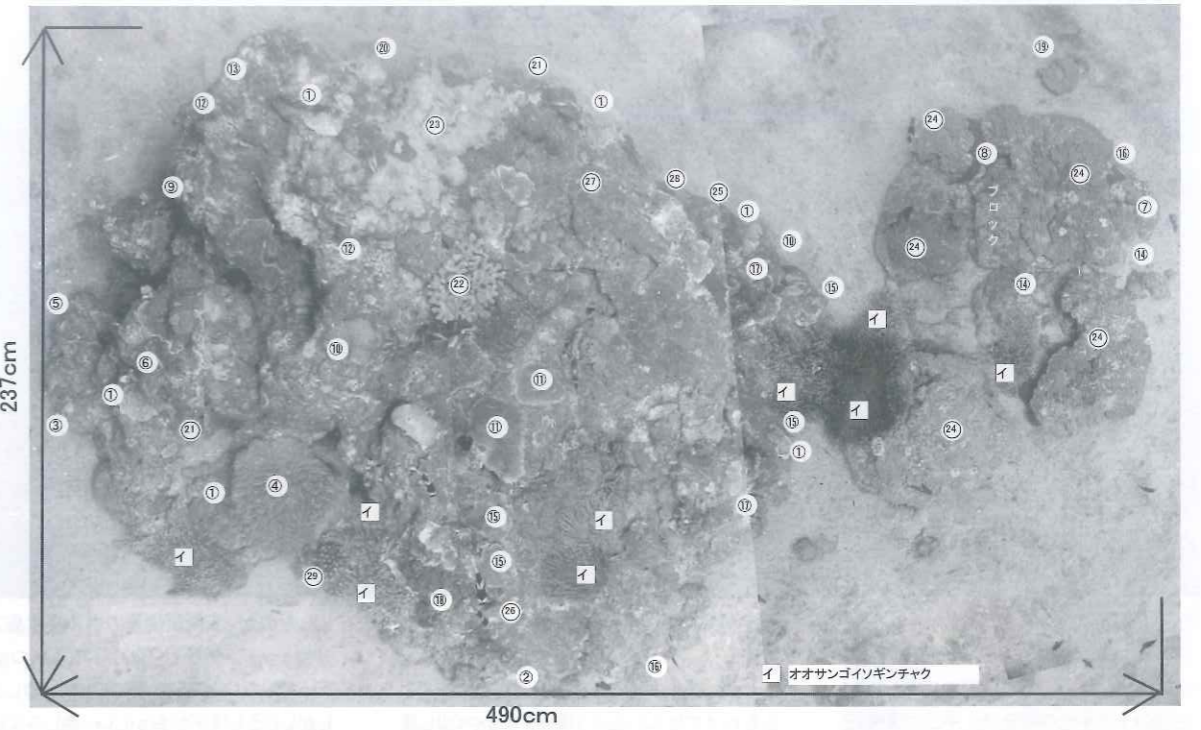
16 コトゲキクメイシ *Cyphastrea chalcidicum*

砂が被りそうな、砂地から飛び出した岩の上に張り付いている。



17 ヒメウサンゴ *Platygyra pini*

夜、触手を出す。スウィーパー触手(攻撃用触手)も発達している。



18 ヨコミズスリパチサンゴ *Turbinaria reniformis*

大きな葉状の群体を作るが、ここでは小さく被覆状になっている。



19 ヤエヤマカワラサンゴ *Podabacia crustacea*

砂地の中の小さな石の上についている。この石と共に動いている。



20 オオサザナミサンゴ *Scapophyllia cylindrica*

熱帯系のサンゴ。時に太い突起状になるが、ここでは被覆状の小さな群体。



21 サザナミサンゴ *Merulina ampliata*

何重にも重なるように群体が大きくなるが、ここではまだ着いたばかりの被覆状。



22 ハナヤサイサンゴ *Pocillopora damicornis*

サンゴ礁域では普通に見られるサンゴ。ここでは1群体しか見られない。



23 コハナガササンゴ *Goniopora stutchburyi*

これでも触手を出しているが良く見ないと見えない。



24 コブハマサンゴ *Porites lutea*

イバラカンザシやカンザシヤドカリなどが付いている。



25 イボリュウモンサンゴ *Pachyseris gemmae*

通常は1mを超える大きな群体になるが、ここでは10cm程度の小さな群体。



26 アザミサンゴ *Galaxea fascicularis*

屋久島ではあまり大きな群体は見ることがない。10cm程度の小さな群体が多い。



27 コイボコモンサンゴ *Montipora monasteriata*

ポリプはイボの隙間にあるらしく、よく見えない。



28 トゲコモンサンゴ *Montipora hispida*

大群体を作り、葉状になったり突起ができたりするが、これはまだ着いたばかりの被覆状。



29 オヤユビミドリシ *Acropora gemmifera*

親指を立てたようなミドリシサンゴ。まだ小さな群体で10cm程度。

# 不思議の国・ブルネイ

市川 聡



ウル・テンブロン国立公園 / キャンピータワー

## 1. あこがれの国へ

1997年ボルネオ島マレーシア領ミリからムルへ飛ぶ小型プロペラ機は、国境を越えブルネイ王国の上空を低く飛行した。そこには飛行機から見渡す限りの広大な熱帯雨林が広がっていた。マレーシア側が伐採跡地やプランテーションばかりで、川は茶色く濁っているのに、ブルネイは熱帯雨林がまさに覆い尽くすという感じで広がっており、川は黒々として澄んでいる。熱帯の川という茶色く濁っているものかと思っていたが、なんのことはない熱帯雨林が伐採されたために赤土が流れ込んでいるのであって、原生林の中を流れる川はあくまで澄んでいるのである。伐採された木材が日本に運ばれていると思うと、なんともやりきれない気分がしたものだ。

ブルネイは石油に浮かぶ国と言われ、世界で最も裕福な国の一つである。おそらく自分の国の森を切るよりも、お隣から買った方が安上がりなのであろう。おかげで広大な熱帯雨林が残された。自然保護とはつまるところ経済問題なのだ。当時いつかはこの広大な熱帯雨林を訪れたいと強く思ったのであるが、当のブルネイは、観光で外貨を稼ぐ必要もなく、アプロ



ヒョケサル

ーチが全くないというというのが現実であった。

しかしブルネイの王様も石油がいつまでもあるわけではないという現実をようやく少し認識し始めたようで、にわかに状況が変わってきたようだ。国際機関・日本アセアンセンターが、ブルネイ・フィリピンへの旅行商品を作るために日本の旅行者を集めてサーベイツアーを実施するという情報を、風の旅行社・原さんから教えて頂き、勇んで申し込んだ次第である。今回は風カルチャークラブのブルネイ熱帯雨林ツアーを企画するため同社の嶋田京一君と2人であこがれの地ブルネイへと旅だったのである。

## 2. バンダール・セリ・ベガワン(BSB)

フィリピン経由で降り立った首都BSBの空港は、閑散としていて静かであった。フィリピンが人で溢れかえっていたので、幾分ホッとしたものだ。

金ぴかのモスクがいかにもといった感じの町へ移動し、今回案内してくれるフレームトラベルの事務所で行程の打ち合わせを行った。ここには日本からの旅行者を受け入れるために日本人スタッフが数名いた。

この国は税金、教育費、医療費は無料というパラダイスのようなところで、ここに住むスタッフをうらやましく思うのだが、残念ながらイスラムの国であり酒が飲めない。マレーシアもイスラムの国であるが、こちらはマレー人以外にはうるさくなく、中国人の店などで酒が手に入ったものだが、この国では酒類を販売していないので、ツアー中飲めるのは持ち込みが許されている酒類2本またはビール12缶までだ。嶋田君と2人で缶ビールを1日2本といいながらちびりちびり飲むのは、なかなか辛いものがあった。いざとなれば車で30分も走れば隣のマレーシアへ行けるので、また買ってくればよいのだが…

ところで今回ブルネイへ行くに当たって参考

にしたのが、安間繁樹著のボルネオ島アニマルウォッチングガイド(2002)で、いくつか是非行ってみたいところを、事前にチェックしていた。しかしどうも様子がおかしい。楽しみにしていた国立公園内のトレイルが、既に壊れていて回れないと言うのである。

出発直前に小林天心さん(観光進化研究所)からTRAVEL JOURNALに連載されていたブルネイのレポートをお送り頂き、飛行機の中で読ませていただいた。この中に、「10年ほど前に観光に関心のある大臣がいろいろと観光開発を行ったが、その後放棄されてしまい機能していない施設が多い。」と書かれていた。それである程度覚悟はしていたのだが、実際に現地ですぐに直面すると愕然としてしまう。

いろいろと聞いてみると、「通れないので閉鎖している」だけで「通ってはいけない」とは言っていないようなので、なんとかこねて、そのトレイルをまわるよう頼み込んで、スケジュールを作った。この時点で当初ガイドしてくれる予定だったエコツアー責任者のジョナサンは、急に予定ができたといって、ガイドは現地の若者ランギ君へと振り替えられた。エコツアーの看板を掲げながらも、どうも自然を売り物にしている様子は感じられず、我々のようなややこしい客の相手をしたことがないので、とっと逃げてしまったようである。

ここから国立公園のある東ブルネイへの水上バスが出るまで少し時間があつたので、町の散策をかねて買い物に出かけた。ここにはヤヤサン・ショッピングセンターという王様の財団が作った巨大なショッピングセンターがある。そもそもブルネイは、三重県ほどの国土に30万人程度の人が住む小国で、どこへ行っても妙に閑散としていまち活気がない。そんなところに巨大なショッピングセンターを建てたわけだから、儲けははなから度外視しているのだろう。人影もまばらで、なんとなく店も充実していない。特に情報収集によった本屋には、図鑑類など一切なく、ブルネイの自然に関する

本は全く手に入らなかった。

一方治安はさぶる良いようで、昼食によつたレストランでも、車のドアや窓は開け放したままであつた。

## 3. ナイト・カエル? ウォッチ

東ブルネイは飛び地となつていて、陸路を移動するとマレーシアを横切らなければならないので出入国管理の手続きが必要となるが、船で行くとその手間が省けて便利である。

BSBの船着き場を出た水上バスは、水上集落の脇を抜け、マングローブで覆われた林の中の水路を、右へ左へと船を傾け、猛スピードで疾走する。なかなか爽快な船旅である。迷路のような水路はどこをどう走つたのか、さっぱりわからないが、40~50分ほどで東ブルネイの中心地バンガルの町に着いた。

ここでガイドのランギ君が迎えてくれる。イバン族の彼はロッジ近くのロングハウスで生まれ育つたそうで、ぼつちやりした感じはムルのウイリーさんを若くしたような感じ。笑顔のいい好青年だ。ここからは車で30分ほどでバタンドリにあるフレームトラベルの出先宿泊施設、レインフォレスト・ロッジに到着した。

ロッジは、ムルのエンダヤン・インのように川沿いに建てられており、ここからは道がないので、ロッジの前からロングボートに乗って上流の国立公園へ向かうことになる。

川向こうには、熱帯らしい高木が聳えなかなか風情のあるところである。ロッジのデッキからは様々な野鳥やリスを見ることができる。ただ目の前の船着き場が、若者達のたまり場になっており、酒もないはずなのに遅くまでなにやら騒々しかった。

着いた日の夜、早速ナイトアニマルウォッチにでかけた。車からサーチライトで動物を探すのかと思いきや船に乗って川を渡ると、ロッジの向こう岸の真つ暗闇な泥沼をザブザブぬかりながら、歩き始めた。わたしは地下足袋で良かったが、嶋田君は登山靴で、初日からグチョグチョ。沢での移動が多いボルネオでは、登山靴は通用しない。結局嶋田君は、ランギ君のはいている、長靴をスニーカーの様に短く切つたような水陸両用ブルネイ靴を購入し、愛用することになった。プラスチック製なのでドロドロになっても洗えばすぐ乾く、なかなかのすぐれものであつた。

しばらくするとカエルが1匹。またしばらくくと別の種類のカエルが1匹。結局4、5種類のカエルを見ただろうか。カワウソやイノシシの足跡はあつたもの、いまちカエル以外には出会えそうもない雰囲気であつた。帰り道、倒木渡りで失敗した嶋田君は、川の深みに落ちてしまい、いきなりデジカメ、パスポート、財布が水没。彼は気丈にしていたが、初日から何とも情けないことになってしまった。

## 4. ブキット・パトリ レクリエーション林

翌日からいよいよ本格的にブルネイの旅がはじまつた。まずブラダヤン森林保護区に設けられたブキット・パトリ レクリエーション林へ訪れた。ここは国立公園のようにロングボートで行かなければいけない奥地ではなく、車で行く手軽さがある。安間さんの本によると「フタバガキ林が美しい。訪ねて悔いのない自然観察の穴場。」と書かれており、手始めにブルネイの熱帯雨林をながめるのには、絶好の場所である。

ロッジから車で一度バンガルの町にもどり、そこから東へ15分ほどでブキット・パトリに到着する。驚いたのは途中、電線にホーンビル(サイチョウ)がとまっているではないか! ホーンビルは熱帯雨林の原生林を代表する大型の鳥で、サイの角のような突起を嘴の上に持つのが特徴である。それが町中の電線にとまっているのであるから驚きである。お隣マレーシアの世界遺産にもなっているグスマン・ムル国立公園ですら、もうホーンビルは捕りつくしてしまったようで、見る事ができなかった。ムルでは民俗舞踊のホーンビル・ダンスにその面影をとどめるだけである。ここにブルネイの森の豊かさが象徴されているような気がした。

ブキット・パトリには全長5kmの1周トレイルが設けられている。急なところは木階段が整備されており、歩きやすい快適なルートである。今回歩いたのはこのうち約1600m。標高約300mのところには展望台があり、そこまで往復した。

入口には簡単なインフォメーション施設やトイレがあり、ここでコースマップが手に入る。この森は大きく「山裾部分」と壁の岩といわれる「崖部分」、崖の上の「台地部分」に分けられる。今回のルートでは、入口から1150mまでが「山裾部分」で、まさに美しいフタバガキの森が広がっていた。遠くテナガザルの声が森にこだまし、フタバガキ類やメンガリスなどの高木が巨大板根を支えられ樹高50mくらいの高



テナガザル

スローリス

さで樹冠を作っている。圧巻は60m近い高さの巨大ドリアン。この高さからドリアンの実が落ちてきたら、間違いなくひとたまりもないであろう。

壁の岩は堆積岩でできた垂直の岩壁で我々が登つたところでは高さ8m程度、森の中とは異なる草本が着生していた。林床では花らしい花は見なかったがこの崖にはかわいい花が咲いていた。

この壁の上にとると岩がごろごろしてくる。岩を抱いた木は、まるで屋久島の森のよう。さすがに巨木は少なくなる。転石の岩場を抜けると、突然視界が開けて展望台にでる。さわや



ブキット・パトリの森

かな風が吹き素晴らしい眺望。ここで休憩しているとき突然けたたましい鳴き声が響き、眼下にホーンビルが飛んだ。樹冠をゆるやかに滑空する大型の鳥の姿は、熱帯そのもので感動的であった。

ここから奥へ行くケランガスというタイプの森になるとマップには書かれている。ケランガスはイバン族の言葉で稲の育たない土地という意味。水はけの良い砂岩質で溶脱が激しく、極めて栄養に乏しいため、限られた植物しか生きられないような土地である。以前マレーシアのバコで訪れたことがあるが、蠟植物(アリノスダマ)やウツボカズラなど昆虫を利用して栄養をとる珍しい植物が分布していた。ポルネオの森林タイプとして重要な要素であり、興味深かったのであるが、ランギ君はここから先は行ったことがなく大変だの一点張り、いまいち様子が分からなかった。

往復2時間ほどで入口に戻ってきた。熱帯雨林を演出する巨大ヤスデ、シロアリの巣、ミツバチの巣等々ポルネオへ来たことが実感できるものが揃っており、半日も十分満足のいくコースだったが、1周5kmといえはヤクスギランドの1周コースくらいの長さであり、1日ゆっくり歩いて楽しむのも、良いツアーになりそうである。

この日はそのあとイバン族のライスフィールドやランギ君の住むロングハウス訪問、ミニ動物園などを回った。ポルネオには豊かな野生動物がいるが、ジャングルに棲む夜行性のものが多く、実際に目撃することは難しいものが多い。このミニ動物園は、ベアーキャット、シベット、マメジカ、サンバー等々ポルネオのネイティブの動物が飼われており、なかなかおもしろかった。

## 5. ウル・テンブロン国立公園

翌日はよいよ今回の目玉であるウル・テンブロン国立公園を訪れた。ロングボートでテンブロン川を遡る約30分、ベラロング川の合流する2股が国立公園の入口である。ここには川に沿って宿泊施設や管理施設が並んでおり、そのスケールにまず驚かされる。それぞれの施設が長い廊下と階段で結ばれており、まるで万里の長城ようである。その後この施設に1泊したが、一見立派に見えるものの、着いてみると電気はこない、水はでない、レストランは閉鎖状態、それに長い階段はスーツケースを引きずることもできないという、全く使えない施設であった。金をかけて施設を作ることはするが、そのあとの管理には全く関心がないようであきれしてしまう。

この施設からテンブロン川を渡った対岸にトレイルのはじまりがある。ここに完成したばかりの吊り橋がかかっているのであるが、まだ検査が済んでいないとか何とか言って、なぜか渡りたがらない。よくよく聞いてみると、以前の橋がフレミーのツアー中に落下したた

め慎重になっているとのこと。高さ40mほどもある吊り橋で、人が渡っているときに落ちたなどとうていありえない話だが、たまたま客がUS アーミーで受け身がうまかったから死ななかつたとか？いやはやこの国の施設は全く信じられない。

川を渡る急斜面が待っているとよく言うのであるが、ここも全くその通りで、とてつもなく急な階段が待ち受けている。安間さんの本によると、国立公園部分はかつて一度も焼き畑が行われたことがない原生林だが、それというのも地形が急峻すぎて村ができるようなスペースがなかったためだと書かれていた。まさにそのとおりで、モツヨム岳への最初の登りのような急斜面が600mほど続くのである。但しこの部分は良く整備されていて、歩きやすいことは歩きやすい。道沿いには多数の解説板が置かれ、休憩用の東屋も多い。但し斜面が急すぎるためか、巨木は多くない。森としてはブキット・パトリのフタバガキ林の方が豊かな気がした。

30分ほどで尾根にあがる。そこから少し行ったところにこの目玉であるキャノピーウォークウェイが姿を現した。マレーシアのものが巨木と巨木を結ぶ樹冠下の吊り橋だったので、このものは完全に自立した5本の鉄製のタワーを橋で結んだもので、自立している分、完全に樹冠を突き抜け、樹冠の上から熱帯雨林を見下ろすことができる。高さ50m長さは80mほどある。特に宿泊した日の早朝、タワーで夜明けを迎えたのであるが、しらじらと明ける森に、テナガザルのモーニングコールが響き、谷間を流れる朝霧がなんとも素晴らしい景色で、しばし時がたつのを忘れて、熱帯の朝を満喫することができた。早朝にはコピトリスやムササビも見ることができ、満足度の高いものであった。ただこの施設もここまで信用できるか、一抹の不安を感じる。

さてここから先が、例の通行止め部分である。ここまでもそうだったが、このトレイルはコンクリートで基礎を打った上に高床の階段や木道が引かれており、とても立派。しかしこの造りは老朽化するとかえってやっかいで、いつ踏み抜くか分からない高床木道はスリル満点。ところどころが倒木で完全に破壊されており、そのたびに木道から下りるのもやっかいで、通行止めになっているのもうなずける。

尾根筋の平坦部になると巨木は少ないが風が通って心地よい森歩きとなる。背中に角のある奇妙なアリやカラフルな昆虫、樹幹から垂れ下がるジャックフルーツや獣の痕跡などをみながら2時間ほどのんびりと歩く。整備されたばかりの頃は、さぞ快適であったであろうと思われる。ここから再びテンブロン川へ向かって下りその支流アパン川の滝へと向かう。テンブロン川にかかっていたはずの吊り橋はもはや跡形もなくなっていた。腿あたりまで水に浸かりながら渡渉する。少し増水したらとて

も渡れないであろう。

ここから支流のアパン川に入り、滝を見に行く。アパン川は、小さな小砂利の川で、快適な沢歩きを楽しむことができる。途中シルバーリーフモンキーにも遭遇。およそ30分で、滝に到着する。しばし滝に打たれて、熱帯の暑さを忘れる。かつてはこの滝の上にツリーハウスがあったようで、ビクターセンターにはその模型が置かれていたが、今はこれも跡形もないようだ。いやはやもったいない話である。ここから公園入口まで川沿いにトレイルが続いていたそうだが、もはや道ではないということで、ロングボートで公園入口まで戻った。

我々風カルチャークラブチームは、ブルネイの自然をじっくり観察するため、本体とは別に先乗りして国立公園の調査を行ってきた。本隊と合流した後、国立公園に宿泊する夜に、再びナイト・アニマルウォッチに挑戦した。レインフォレストロッジでのナイト・カエルウォッチの際に、国立公園に行けばもっといろいろな動物が見られると聞いていたので、国立公園でのナイト・アニマルウォッチを楽しみにしていた。しかしこの公園のルートは限られているようで、再びキャノピーウォークウェイまで登るとい。これは夕食後ちょっと動物を見に行くといったアトラクションではなく、本格的な登山である。そのうえ登りは整備された木道ではなく、裏にあるジャングル・トレイルという山道を利用した。明かりを照らしながら、まさにモツヨムへの登りのような急な山道を登っていく。間の悪いことに何もでてこない。他のメンバーの顔に明らかに疲労と不満が現れてくる。

何もでてこないままどうとうキャノピーウォークウェイに着いてしまった。この日のガイドは、本隊ともにやってきたフレミー・トラベルのエコツアー責任者のジョナサン。彼によると今日は暑くて動物がいないのだという。いやはやご苦労様である。ベンチで涼んだり、またタワーに登ったりしてしばし気分を変えて、木道を下山。ここでジョナサンがヒットを飛ばす。木の上にスローロリスを見つけたのである。原猿の仲間て大きな丸い目が、木の上で光っている。その名の通りゆっくりと動くのでじっくりと観察できた。なんと一矢報いて盛り上がったのだが、なんとジョナサンはこれをムササビと言っている。こちらは図鑑を出して、見せているのに意見を変えようしない。これにはせつなく初めてスローロリスを見て盛り上がった気分がしばらくはぼんやり。そもそも本屋に図鑑がなかったように、彼らはガイドであるにもかかわらず図鑑を持っていない。こちらがマレーシアで仕入れたポルネオの図鑑を見せたら、こんな本があるのかと驚いて、一生懸命見ていた。そんなことだから種名に対する認識は甘く、ロジックにでてるリスの名前をランギ君に聞いたときにも、リスの仲間には、リスとムササビがいて、あれはリスだと言われて、あきれってしまった。

今回はテンブロン川でのカヤックも楽しんだ。ロッジから国立公園入口までの半分ぐらいの距離を2時間半くらいかけて下った。今回の水量であれば、難しい事はなく、適度に楽しめる瀬を乗り越えながらの、楽しい船旅であった。途中少し上陸して歩いた小沢ではオオトカゲの足跡を見たり、淵にたまった落ち葉を両手でがぼつとすくい上げて、小魚を捕ったり楽しく過ごした。また途中の川岸には蝶が集まって吸水しているところがあり、美しい熱帯の蝶の群舞を見ることができた。ついでに泳いで渡るキングコブラも目撃した。ちょっとびっくり。

## 6. セリロン島マングローブ林

熱帯雨林を満喫したあとは、マングローブを訪れた。再びバンガルから水上バスに乗ること約40分、セリロン島レクリエーション林に到着した。東ブルネイの東端の海岸を川で陸から切り取ったような形でほぼ全島マングローブで覆われており、島を横断する形で約2.5kmほどの木道が引かれている。

圧倒的に多いのはフタバナヒルギで、多くのアーチ状の支柱根で幹を支えている。そこにホウガンヒルギとニッパヤシが混ざり、コースの最後の方に膝根が立ち上がるオヒルギがでてきた。種類の異なる単調で分かりやすい。樹高30mを超える高木が聳えるマングローブは圧巻である。

マングローブの根本にはエビやアナジャコ、カニ、小魚がいてにぎやかだ。また今回はヒョケザルを見ることができた。ヒョケザルは顔がキツネザルに似ていることからサルといわれているが、サルとは関係のない生き物である。ムササビのように空を滑空するが、ムササビとも違う、珍しい動物だ。尾の先まで皮膚に覆われているので、飛ぶとホームベースのような形になる。木道のすぐそばの木にいたので、間近でじっくりと見ることができた。そんなことをしながら1時間ほどのんびりと歩いてマングローブの自然を堪能することができた。夜にはワニが泳いでいるというから、夜に訪れるのも面白いかもしれない。

一度BSBに戻ってから、小型の水上タクシーに乗り換えて今度は川を上流に遡り、テングザルを見に行く。テングザルはマングローブの葉を主食とする大型の猿で、ポルネオ固有である。なんといっても天狗のように突き出た



鼻が特徴。だいたい群がいるマングローブの位置が分かっているようで、90%の確率で見ることができそう。

マングローブといっても、川沿いに残された帯状の林で、裏には住宅や道路が透けてみたりする。そんな林にテングザルが姿を見せる。こんなところもブルネイの自然の豊かさを印象づける。3つほどグループをみただろうか。雄の大きな鼻や出っ張ったお腹をしっかりと写真に収めることができた。このアニマルウォッチングクルーズではカニクイザル、マングローブヘビ、オオトカゲ、シロガシラビなど多くの動物を見ることができ、おもしろかった。

## 7. ジャングル・デーブ


今回のガイドのランギ君は良い目を持ったなかなかの好青年なのだが、いかんせん図鑑もなく、基礎的な自然科学の素養で物足りないものがあった。上司のジョナサンにおいては、いまいちやる気すら感じられなかった。これでブルネイのガイドはまだまだだなどと思って帰国するところだった。

最終日、地元観光業者との会食があった。業者のお偉いさんと会ってもこれといって話もなく、期待していなかったが、いろいろ話をしているうちに、どうも自然に詳しい人物がいることに気がついた。セリロン島でヒョケザルを見たという話をしたら、それは入口から何m位のところだろうといわれ、まさにその通りだった

たので驚いたのである。いろいろと話をしていると、オランウータンに出会った話やホテルの木の話、マレーグマの話など、実に興味深い話がポロポロとでてくる。また今回テンブロン川で見かけた、うなぎのような奇妙な生き物についても、ジョナサンはさっぱり要領を得ない説明をしていたが、ブルネイで確か2年前に発見された生き物で、メールで写真を送ってくれば正確な情報を教えてくれると約束してくれた。帰国後メールを送ったところ、すぐに返事をくれ、そのアシナシイモリの仲間の学名種名を教えてくれた。

彼の名前は、通称ジャングル・デーブ。MONA FLORAFUNA TOURS ENTERPRISEの常務取締役でその名刺にはEco-Tourism EXPERTと書かれていた。マングローブのテングザルウォッチングも彼が始めたことらしい。彼の話を聞いていると今回行かなかったところにもおもしろい場所、おもしろい活動がたくさんありそう、ワクワクしてきた。一人や二人のガイドを見て、ブルネイのガイドはまだまだだなどと言っただけで良かったと、多いに反省した次第である。

ということで来年の2月にはジャングル・デーブと組んで、ブルネイツアーを実施することになりました。ポルネオの穴場中の穴場といついてもブルネイの自然を満喫できる企画を用意しますのでご期待下さい。




### 2008 ブルネイツアー 決定!

企画/YNAC、主催/風カルチャークラブ、同行講師/市川聡  
2008年 2月7日(木) 成田発 2月12日(火) 成田発朝帰国(5泊6日)  
主な行程:

- ・ 夕方のテングザルウォッチング
- ・ ブキット・パトリのフタバガキ林、ケランガス林のフォレストウォーク
- ・ ウルテンブロン国立公園での早朝キャノピーウォーク、沢歩き、カヤック
- ・ セリロン島のマングローブ観察
- ・ ブルネイ川ナイトサファリ/ホテルの木、クロコダイルの光る目

詳しくは風カルチャークラブへ  
電話 03-3228-1065



# 冬虫夏草恋歌

内室紀子

「冬虫夏草(とうちゆうかそう)」というものを、ご存知だろうか？これ、虫に生えるキノコを意味する。といっても、正確には「冬虫夏草」は固有名詞で、ヒマラヤ高山帯、標高4000m付近の草原に発生するコウモリ蛾の幼虫に発生するキノコの名前だ。そして、これが「精が付く！不老不死！」の高級漢方として市場に出回っているわけなのだが、現在では「昆虫やクモ、一部の菌類を栄養源として生きるキノコ」はみな総称して「冬虫夏草」もしくは「虫草(むしくさ)」と呼ばれている。そもそもこのキノコ、当初はこの妙な姿から、「夏は植物で実を結び、冬は虫として動き回る」と考えられ、中国でついた名前なのだ。

私が初めて虫草を見たのは、3年前のこと。友人がとって大事そうに見せてくれた。それが何の種類だったかはもはや思い出せないが、「へ～、面白いな～。」と思ったのは覚えている。その後、その家に遊びにいきたびに虫草の話聞くことになり、しかも別の友人(現:ダンナ様)まで虫草の虜になっていき、あげくの果てに「ゲッチョ」こと盛口満さんが屋久島に虫草探しに行くことになり、一気に盛り上がりを見せ、私はこの不思議なキノコにすっかり夢中になってしまった。まずキノコの形が一般的なシイタケ型ではなく、実に奇妙な形をしている。しかも、そのとりつく虫の種類によってキノコの形がまたそれぞれで、同じ形は二つとない独創的な姿が純粋に「カッコいい」と感じた。この「カッコいい」キノコが、ひっそりと森の中で姿を現している。「虫草探し」はウキウキワクワクのちょっとした「宝探し」なのだ。

まず始めに私が見るようになったのは、「クチキ



クチキフサノミタケ 小さーい

フサノミタケ」。朽木に生息する甲虫類の幼虫に生える虫草だ。これは朽木を探せばよい訳だから、見つけるのも比較的簡単。次に見やすいのは、蟻などの幼虫のサナギにつく「サナギタケ」や蟻から生える「アリタケ」。これらも朽木、でしかも子実体(キノコ)が、オレンジや黄色をしているので、慣れれば森の中でポンと目に飛び込んでくる。逆に見つけにくいのが地中の虫草。蟬の幼虫を寄主とする「セミタケ」の仲間でも、「ツクツクボウシタケ」や「ツブノセミタケ」は子実体が白いのでまだ見やすいが、「オオセミタケ」「ヤクシマセミタケ」「ウメムラセミタケ」になると、子実体は茶色やグレーの姿をしており、土や落ち葉と同化してしまい、見つけだすのにはそれなりの経験と粘り強さが必要となる。

そしてこの虫草は、掘り起こすのも実に地味かつ根気がいる。標本をとるために初物だけを掘らせてもらっているのだが、蚊に刺されながら、丁寧に、ていねーいに、掘り進めないと、デリケートな虫草はすぐに壊れてしまう。特にセミタケ類は「早く」とあせると必ずといっていいほど、子実体下部のやわかな柄は切れてしまう。虫草を途中で壊してしまうことを「ギロテン」と呼ぶが、ゲッチョこと盛口満さんに「冬虫夏草の謎」(どうぶつ社2006)のなかで、「ギロテン娘」と紹介されてしまうほど、私はこのギロテンが得意。それでも、私はこの作業が大好きだ。掘り進めながら、虫草のこと、それに寄生された虫のことを考える。ここで、何をしていたのか。これからどうするつもりだったのか。なぜ、こんな姿になってしまったのか…。冬虫夏草は、どこで寄主となる虫に感染するのか、その後どれ位の時間をかけて寄主の虫を殺し子実体(キノコ)を発生させるのか、その生態はまだ分からないことだらけ。そんな謎に満ちた世界に想いを巡らせながら、虫草と自分を繋ぐ細くて柔らかい糸(子実体)が切れてしまわないよう、相手に合わせながら、大切に距離を近づけてゆく。こんな風を書く、まるで恋のようだが、実際なかなかの至福の時間である。あせつちやいけな、想いを押し付けてしまっても、



オオセミタケ

うまいかない。

まずは、「カッコいい」から始まった私の虫草祭りも、次第に「虫草をとりまく環境」というものに目を向けるようになった。虫草探しのポイントは「寄主となる虫はどういう環境で生きているか？」に気づくこと。セミタケ類にしても、一年中色んな種類が顔を出すわけではない。屋久島だと、春にオオセミタケから始まって、ヤクシマセミタケ、ツクツクボウシタケと秋口まで続いてゆく。ひよっとしたら、蟬が羽化する順番となにか関係があるかもしれない。虫草がよく発生するポイントを「坪」と呼ぶのだが、屋久島で坪になるのは大体決まって「ある程度成熟した照葉樹林もしくはヤクスギ林」になる。日本の冬虫夏草の第一人者、清水大典さんは「冬虫夏草」(ニューサイエンス社発行 1974)の中で、「空気が清浄で、空中湿度が高く、適当な樹陰(散光)地帯に虫草は発生する」と記しているが、屋久島だと天然林ならほぼその条件を満たしていることになる。ところが、それだけでは虫草は出てこない。その環境が虫草だけでなく、その寄主となる虫たちにとっても良い環境でなくてははいけない。つまり、色々な生き物にとってバランスのとれた森で、虫草は生きている。そういう意味では、冬虫夏草は森の豊かさの象徴とも言える。小さなキノコが、多様性に富んだ大きな森の姿を教えてくれるのだ。

## つれづれエッセイ

### 「楠川城」

屋久島にもいくつか城跡があるのをご存知ですか？私の住む楠川集落には楠川城の城跡があります。これにちなんで5月には楠川城祭りも開催されます。近所の人は「昔お城の前の川に大きな楠が倒れており、お城に行くときにそれを橋として渡っていたのでこの辺りは楠川という地名になった」と話していました。ということで、今回は集落と馴染みの深い楠川城について調べました。

楠川城は1524年に種子島氏12代忠時が築きました。種子島氏のルーツは鎌倉時代、島津荘大隈国地頭名越氏の代官として種子島に派遣された肥後氏です。肥後氏の本拠地が種子島だったので島名をとって種子島氏と名乗るようになりました。当時屋久島は種子島氏領でしたが、南大隈には禰寝(ねじめ)氏という南大隈の有力な郡司系の領主—南大隈で古くから力を持っていた一族—がおり、種子島では在地勢力の禰寝氏と新進の種子島氏の支配権争いが行われていました。種子島氏はこの禰寝氏による攻略を警戒して楠川城を築いたのです。両者にとって領地拡大—南島(屋久島や口永良部島など)を支配—する為、屋久島は重要な拠点でした。特に楠川は屋久島の東北部にあり、正面に種子島が見えていますので、種子島氏にとって種子島、屋久島間の連絡を行うのに好都合な場所だったのです。1543年には楠川城に禰寝氏が攻め入り、両家の合戦が行われたのですが、この時に日本で初めて銃が使われたとも言われています。

このように見ていくと、屋久島は、中世までは交通の要所として評価されていました。ところが1595年、種子島氏に変わって島津氏が屋久島を統治するようになった。

### 「未来を担う子供たちを海に誘う」

今年の夏、私が暮らしている集落・志戸子の子供会から「海のお話をやってみないか？」というお誘いを受けました。本業であるガイド業の傍ら長年抱いていたもう一つの夢「未来を担う子供たちを海に誘う」その第一歩を踏み出す為の「切符」をようやく手にしたのでした。そして去る8月1日、小学1年生～中学生の20人位の子供たちに 約1時間の「海のお話を」しました。志戸子の海と言えば、「まるでお花畑のような浅場(水深1m)のサンゴ群落」と「深場(水深約15m)のウスサザナミサンゴの大群落」そして、そのサンゴを産卵床とする「コブシメ(コウイカ)の大群」と、見所盛りだくさん。何について話そうか散々悩んだ末、今回は「コブシメとウスサザナミサンゴの関係」に焦点を当て、ダイバーの目の前でコブシメの大群がサンゴに産卵しようとする繁殖のドラマを、静止画ではなく「ムービー」で紹介しよう！と企みました。

私たちが暮らす目の前の海中にはこんな奇怪な生き物(コブシメ)が昔々から住んでいて、毎年同じ時期にサンゴにやってきては産卵を繰り返していました。でも、ここ数年、あれだけたくさんいた彼らの姿を見かけなくなってしまったのです。今、海の中では一体何が起きているのだろうか？というストーリー。



サンゴに産卵する、コブシメたち

事前情報で志戸子の子供たちはシャイだと聞いていたのでどんな反応を示してくれるか心配で心配で。上演前、本当は心臓バクバクだったのですが(笑)、子供たちの「知りたい」オーラがものすごく、とつとも盛り上

頃から、屋久島は交通の要所というよりはむしろ材木資源の地として重要視されるようになっていったのです。

時代ごとに何が評価されるのかは変わり、今では屋久島は残された自然が評価され、世界自然遺産にも登録されました。ただこの自然は決して人の生活から切り離されたものではないし、日本の歴史に大きく影響されてもいます。それぞれの時代の人々がどんな思いで屋久島を見ていたのかを考えるといつも見ている風景が私にはより迫力を持って見えて来ます。思い出せば私が初めて屋久島に来て白谷雲水峡に行った時、一番印象的だったのはコケの美しさでも水の綺麗さでも屋久杉の大きさでもなく、楠川歩道は江戸時代に作られたものだったということです。それを聞いた瞬間回りの景色が違って見え、当時の人はどんな思いでこの道を歩いていたのだろう、感慨深く、屋久島に対する興味が一層深まったのを覚えています。屋久島は自然そのものももちろん素晴らしい、その仕組みを見るのも面白いですが、人と自然の関わりが焦点をあてるとまた違った面白さが見えてきそうです。(長谷川りえ)



参考文献 上屋久町郷土史 1984、井元正流「種子島」1999

がりつつ、あつという間の1時間でした。子供たちと会話のキャッチボールができたことがとても楽しく、また自身の引き出しも増やすことができ、短いけれどとても充実した時間を過ごすことができました。



子供たちに語る、高橋

近年「海は危ない」という理由で、海の中を覗いたことがない子供たちがたくさんいる現実。こんなに素晴らしい海中世界がすぐそこにあるのに！確かに海は陸上と別世界。毒を持った生き物や棘を持った生き物もたくさん生息しているし、何より息が来なければ命を落としかねない怖いフィールドです。けれど何が危険なのか、知った上で踏み込むのと知らないで入るのは「ケンケン」の質が違います。それを教えてあげられるのが我々大人たちでありたい。

そんな大人の一人として、私は屋久島の各集落の「子ども会」を全て制覇したい！そして「海のお話を」をきっかけに実際に自分の目で海を覗く子供たちが増えていくといいなあ…そして、いつの日か屋久島の子供たちはみ～んな、自分たちの足元に広がる海に、どんなにたくさんの生き物が暮らしているのか熟知して、かつ、それを誇りに思っている！そんな日が来るのが私の夢です。さらにいつの日か、日本各地の小学校へ 出前授業に行きたい高橋です。呼ばれればどこへでも飛んでいきますよ～！「びんくのなまこ先生が行く」(\*)って感じで(笑)。

(高橋宏美)

(\*)「mid」で、「びんくのなまこ」という名前が「屋久島の海」というコミュニティを主宰しています

## 【つわりと出産と人の想い】

5月初旬、仲の良い友人が屋久島に遊びにきたので、我が家で「生春巻きパーティー」を催し、おいしく楽しい時間を過ごした。しかし、その翌日から体調がおかしく、なんとも言えない胸のむかつきに襲われた。その気持ち悪さは、まるで屋久島の春の風物詩「塩らっきょう」を食べ過ぎたときにおこす胸焼けを、更にひどくしたような感じだった。普通、塩らっきょうの胸焼けなら数時間で収まるのだが一日経っても収まらず、「昨日の春巻きの具材の食べ合わせが悪かったかな？」と思い、様子を見るために数日過ごしたが症状は回復せず、終いには事務所で座っただけでもつらくなってきた。「もしや!？」と思い、病院に駆け込むと「妊娠2ヶ月目に入っていますね。」と、嬉しい一言を医師から頂いた。

妊娠は本当に嬉しかった。でも、つわりは本当につらかった。台所、冷蔵庫、洗濯物、主人(職業:ガイド)の濡れたザック等々、匂いの発するもの全てが気持ち悪さを誘引し、また少し動いただけで疲れて気持ち悪くなる。何より一日のうち一番楽しみにしている食事が食べられない。ご飯をしっかり食べていた私がお茶碗に軽く一杯も食べられなくなり、あつという間に体重が2kgも減ってしまった。体力も落ち、イメージしていた「楽しい妊婦生活」が脆くも崩れ、ジメジメした気持ちを引きずっていた。しかし、そんな私に「それは赤ちゃんがいる証拠だから」と優しく励ましてくれた主人の一言は本当に有り難かった。ただ、後々いろんな妊婦さんの話を聞いてみると、少しなりとも動いている私のつわりは軽い方だったらしい。

「つわり」とは何ぞや? 多分、新米妊婦さんに最初に降り掛かる問題であり、女性なら誰しも興味のあることと思う。まず、「つわり」は漢字で「悪阻」と表記し、語源の「つわる」という語は初潮の頃を指す言葉で、成熟する寸前という意味があるそうだ。また、地方独特の呼び名もあり、クセ、クセヤミ、チズワリ、ミヤミ、サーマキなどと呼ばれている。ちなみに英語では「morning sickness」。

そして「つわり」はなぜ起こるのか? 一つの要因として妊娠することによって、子宮内の絨毛(のちの胎盤になる器官)から大量のhCG(ヒト絨毛性ゴナドトロピン)というホルモンが分泌されるために起こるとい説がある(これが増加し尿にも含まれるため、妊娠検査薬は尿にて検査する)。また、「FT4(遊離サイロキシン)という甲状腺ホルモンも影響している」とか、「胎児を母親の体が異物と思い、アレルギー反応が出してしまうため」など説は様々。面白かったのは、「妊婦のつわりは自然



現在妊娠8ヶ月目です! (07年10月)

界にある毒素によって胎児がダメージを受けない為に存在する」というもの。妊娠初期に食中毒などを起こさせないように母親の体が自然に毒性のあるものを受け付けない、という説。私もつわりに気付き、食材を選んで食べるようにしてから随分つわりが楽になったので何となく共感できたのだが、産婦人科の医師は一笑に付しただけだった。いずれにしても、その実態ははっきりとわかっていないらしい。

また、「つわり」は決して妊婦(女性)だけに起こりうるものではなく、夫(男性)にも起こることがある。妻のつわりの時期に重なるようにして食欲の減退や吐き気、体調不良などの変化が現れる男性もいる。地方によっては、トモクセ、アイクセなどと呼ばれており、昔から周知の事実だったようだ。医学的にはよくわからないとのことだが、父親になるプレッシャーがそうさせているのかもしれない、とのこと。自分と同じ苦しみを共に分かち合えるなんて、妊婦にとってはなんて心強いことだろう。

人類学で「出産」というのは、女性の通過儀礼と言われている。個人が自分以外の新しい個性を受け入れるため、そしてそれを廻りに知らしめるためのもので、その儀礼を通じて自分も廻りもその人物が母親になったことを自覚する。また、出産は女性だけの通過儀礼ではなく、父親の通過儀礼である地方もある。「擬婉/偽婉(ぎべん)」と呼ばれ、妻が出産のときに夫も床についたり、苦しんだりして、様々な禁忌に従うもので、禁忌には妻が妊娠中に特定の食物を食べてはいけないなどがあり、仕事や漁撈に出ることを禁じたり、またその道具に触れてはいけないなどが知られている。この屋久島でも、家族で亡くなられた方が出た場合を「黒不浄」、女性の生理や出産を迎えた場合を「赤不浄」と呼び、それらの家族は集落の神事などには参加できないとされていた。これらは忌み嫌われるもののように受け止められがちだが、「精神的にショックを受けたり、プレッシャーを感じている者に対する集落の人達からの気遣いなのかもしれない」と、某YNAC重役が語った。出産に関しても新しい生命を迎える家族への気遣いではないだろうか、とも思える。つまり、出産における禁忌とは、集落という共同体の中で新しい家族を迎える人達のための通過儀礼であるのかもしれない。

新しい命を身ごもるというのは何とも神秘的で、言いようのない幸せに包まれる。しかし、必ずしも楽しいことばかりではなく、妊娠に伴うつわりなどでは気持ちも沈みがちになり、精神的にもつらい日々を過ごさねばならないときもある。だが、出産とは決して女性だけで背負うものではなく、父親・家族とともに乗り越えていくもので、集落という共同体が新しい命の誕生を見守ってくれている。一つの命を通して関わる人々の共通の通過儀礼であるのかもしれない。様々な人の想いのもと生まれてくる新しい命のためにも、乗り越えなければならない大きな壁なのである。

私は今までYNACでガイドとして頑張ってきたが、これからはこの屋久島で母として再スタートいたします。この期にYNACを去ることとなり、お世話になりました皆様とお別れすることは大変残念ですが、次回お会いできるときは「肝っ玉母さん」へと変貌を遂げた私を見ていただきたいと思っています。長い間、本当にありがとうございました。

(古賀早苗)



## ご無沙汰します

近頃屋久島も海外からの旅行者が目立つようになって来ました。屋久島の、日本の素敵なところをグローバルに伝えられたらどんなに素敵だろう。そう思いつつも、私にとって最も苦手な教科が英語。おなじ人間なのに、何故か外国人を目の前に緊張してしまうジャパニーズ脱却を夢見て、今年3月からニュージーランドにきています。

ここ数年、ロード・オブ・ザ・リング、ラスト・サムライなど。映画のワンシーンを飾る、壮大な自然が印象深くなって来たニュージーランド。同じ英語圏でも、どうせなら暖かくて自然一杯のところがいいな。そんな一挙両得ねらいでやってきました。ところが緯度は日本より極に近く、思ったより寒い国。現在冬の真っ只中で、夏が待ち遠しい今日この頃です。

とは言え南北に長く、マングローブが発達した北部から氷河をたたえる南部まで、変化に富んだ植生は日本そっくり。しかも、マウント・クックを含めた南島の高峰群南アルプス。そこへ吹き込む西からの海風もたらず大量の雨。屋久島と同じ図式が生み出す素晴らしい、どこか懐かしい景色がたくさんあります。

## DOC(Department of Conservation)

そんな国で、自然に触れながら英語を話す。都合のいい環境をめざして私が最初に行き着いたのが、今回紹介するDOCのボランティアワークです。ニュージーランドは現在、国土の1/3が国立公園や森林公園に指定され、DOC(環境保全省)とよばれる国家機関が公園内の歴史的建造物や植物、動物、歩道の維持管理、全てを担っています。

ニュージーランドの国土面積は日本の7割ほど。そこへ人口は400万人前後。多くは北島オークランド近郊に集中しているため、一歩郊外へ出ればどこも人が少なく快適です。ただ、自然はどうかと言われると、人の歴史は浅いものの、先住民マオリ族の定住に伴い食料源としての原生動物が激減。1700年代後半から始まったヨーロッパ人の本格的な入植による牧草地化で、森も意外に失われています。また、元来天敵(哺乳類)のいない鳥の

楽園だったニュージーランド。そんなこの国に特化した、飛べない鳥(キウイやタカヘ)たちも、住処を追われた上に、入植とともに放たれた動物の影響で激減。DOCは、そんな窮地に立たされた生態系の再生を図るため、様々な仕事をしています。

## ボランティアワークについて

DOCの仕事がすごいのは、保護にとどまらず、森林の再生や害獣駆除など、ニュージーランドを原生の状態に戻すため、気の遠くなる作業に本気で取り組んでいること。目標はニュージーランド全土と言いたいところですが、現実的に困難。そこで、まずは閉鎖環境で効果の出やすい沿岸の島々から計画が遂行されました。すでに20年生以上の木々が覆われ、害獣もほぼ駆除でき、再び鳥たちの楽園として再生した島が現実にあります。とはいえ稚樹を育て、植林。捕っても捕っても中々減らない害獣の駆除。職員だけでは到底間に合わないこの仕事の実現は、ボランティアとの連携の上に成り立っています。

その成功例として有名な島がTiritiri Matangi Island(以下Tiri)。この島も例に漏れず、1970年代までに人の手によってほとんどが牧草地化されました。そこへ動物たちの住処となる森を作るため、1984年から10年かけて、数千人のボランティアが協力し、25万本のニュージーランド原生植物を植樹。さらに、再生した森で少しずつ原生動物たちを育み、世紀を越えてTiriは再び緑豊かな野鳥の楽園になりました。

さらに、この貴重な自然を環境教育の場として有効利用すべく、Tiriでは観光客へ\$5のガイドウォークを展開。ガイドも全てボランティアなので、実質\$5はこの島のボランティア機関Supporters of Tiritiri Matangi(SOTM)の運営資金として寄付されます。また、継続的に行う必要がある動物たちの世話、歩道のメンテナンス、ビジターセンターの運営、全てにおいて、レンジャーと共にボランティアが関わっています。

## 参加してきました

こうした一般参加型の自然保護、再生活動

は、ニュージーランド人に限らず誰でもウェルカム。事前の登録は必要ですが、私もTiriを含めて3つの島でボランティア活動に参加してきました。歩道の整備、害獣駆除トラップの設置、ペンキ塗り、植林、はたまたガイドと内容は様々。日帰りのできる仕事や、1~2週間泊り込みで行う仕事もあります。ただ、全てに共通しているのは、「仕事を楽しんでもらう」と言うDOCの姿勢。決して無理はさせず、感謝の気持ちを忘れません。

だからこそ、参加する側の奉仕精神も強力なんでしょうね。平日でもボランティア活動に時間を割ける年代は限られますが、多くが60代以上。みんな本当に生き生きと、よく働きます。打ち込めるものを求める人たちに、最適な環境で仕事をしてもらう。しかもそれが世の中に貢献し、成果がゆっくりでも目に見える。理想的なシステムです。日本でも人手不足を解消する方法、ありそうですが...

そんなこんなでニュージーランド生活3分の1は国をあげての自然保護活動に触れてきました。肝心の英語力は? 微妙ですな。

Little Barrier Island  
※トウアタラ飼育ゲージにて

※トウアタラ: ニュージーランド固有の爬虫類。トカゲとは目レベルで異なるムカシトカゲ目に属し、約2億年前から姿が変わっていないと言われる「生きて化石」(注: 手の上ですよ)



## Calendar・2007

- 1/26~27 松本 東京でサンゴ礁年説明会に出席  
1/26 岡田YNACを休職 ニュージーランドへ修行の旅へ  
2/27~3/7 市川 風ツアー視察のため、ブルネイ・フィリピンへ  
2/28~3/2 岡山理科大学 屋久島実習受け入れ  
3/5 山の神祭り  
3/6 松本・高橋・鷺尾 救急法受講  
3/11~14 松本 鳥取県米子市で、日本エコツーリズム協会主催「エコツアーガイド養成講習会皆生温泉」セミナー講師を務める  
3/16 松本 東京で珊瑚会議に出席  
3/26 榎村YNACへ復帰 おかえりなさい  
3/26 小林産休に入る  
3/30 口永良部島「霧島屋久国立公園」に編入  
4/1 小原風子、市川初夏ともに、はれて大学生に  
4/11 小林 長男・桜大(おうた)を無事出産 おめでとう！  
4/15 YNAC HPに英語バージョンが登場  
4/16 IEツアー・コースガイド完成  
4/16~4/20 松本 再度、セミナー講師として鳥取県米子市へ  
4/22 NHK・BSハイビジョン「地球と出会う！エコツアースペシャル」に日本代表(!)として、小原と市川が登場 連日雨の中の取材で大変でした  
4/26 藤岡 事務スタッフ開始  
4/28~5/5 GW スライドショー開催  
5/6 YNACダイビング部 新HPを開設「海ブログ」ほぼ毎日更新中！ぜひ見てください <http://www.ynac.sakura.ne.jp/>  
5/13 ダイビングクラブ「一湊タンク下小パッチ」  
5/20 小原 自然に親しむ集い「コケの観察会」講師  
5/20 鷺尾 屋久島益救神社で学式&宮之浦公民館で大爆笑披露宴めでたく内室紀子になりました  
5/23~5/26 風カルチャークラブ「原生林縦走」  
5/25 第一期研修生・古賀が退職 9年間お疲れ様でした  
5/26 観光協会主催「しゃくなげ登山」今年は花が少なかったです  
6/23 TV東京「TVジャングル」に内室登場 増田恵子さんとMTBで西部林道を紹介 松本社長は「ピンクレディー振り付けDVD」持参でロケに参加する  
6/24~6/25 ダイビングクラブ「1泊2日 口永良部島」  
6/30 山の神祭り ガイ連協で一湊海岸の清掃  
7/11~7/13 屋久島高校 職場体験実習 受け入れ  
7/14 台風4号屋久島上陸 最大瞬間風速47.2m/secを記録 荒川登山口への林道が一部決壊 現在シャトルバス運行で対応中  
8/1 高橋 志戸子・子ども会でスライドショー開催  
8/16~8/18 風の旅行社「沢登り三昧ツアー」  
8/26 ダイビングクラブ「志戸子」  
9/5 ダイビングクラブ「栗生」  
9/1 YNAC HP アクセス100万件達成！！やった！！  
9/12~9/13 小原 屋久島高校「ヤクスギランド インタープリテーション実習・田代海岸 地質観察実習」講師  
9/21 屋久杉銘水石鹸発売開始 屋久杉の削りくずを浸した滝水で石鹸を練り上げました 純植物性のお肌しっとり高級石鹸です  
9/22 市川 屋久町閉町記念映像~ありがとう屋久町~に、自然の写真を多数提供 閉町記念イベントで放映され、DVDとなる  
9/30 小原 環境省主催「自然に親しむ集い~落ノ滝~」講師  
10/1 上屋久町・屋久町合併「屋久島町」になりました  
10/4~10/6 東京環境工科専門学校 屋久島自習受け入れ  
10/5-9 長谷川 インタープリターセミナー(滋賀)に参加  
10/9 市川 昨年に続き一湊小学校総合学習の授業。屋久島の酸性雨について話しました(4・6年生対象)  
10/14 ダイビングクラブ「栗生」  
10/17-19 東京環境工科専門学校 屋久島自習受け入れ  
10/19 松本・高橋 一湊小学校お話会でスライドショー開催  
10/25 藤岡 事務退職 小林 産休を終え復帰  
10/26 山の神祭り  
10/27 高橋 漂着物学会総会 in 種子島に参加  
10/30 高橋 コーラルウォッチ指導員講習会に参加

## Contents

- 巻頭言 「ヤクシカと折り合いをつけた森」 小原 比呂志 1  
SPECIAL 「山の料理対決 ~キャンプに行ったら何食べる?~」  
榎村 精一 & 佐藤 崇之 2  
SCIENCE REPORT 「タンク下小パッチ 生物リスト」 松本 毅 6  
海外レポート ~その1~ 「ブルネイ」 市川 聡 8  
屋久島有象無象 「冬虫夏草恋歌」 内室 紀子 12  
つれづれエッセイ 「楠川城」 長谷川 りえ 13  
「志戸子スライド上映会」 高橋 宏美  
「妊娠とつわりと人の想い」 古賀 早苗  
海外レポート ~その2~ 「from New Zealand」 岡田 愛 15

## Library

### 「屋久島7・7'07」 山と溪谷社 (内室)

毎年、本作りのお手伝いをさせて頂いている屋久島ブック。今年はエコツアー特集ページで内室が西照葉樹林フォレストウォークを紹介しています。

### 「ヤクシカから見た屋久島の森」 生命の島No.74陽春号 (市川)

「ヤクシカが増え屋久島の森が減る」という説に対して、ヤクシカ側から見た屋久島の森について考察を加え、屋久島の森とヤクシカと共にあると反論。

## 編集後記

- ★こここのところサンゴに目覚めています。国際サンゴ礁年2008は是非屋久島で盛り上げたいです。(ま)  
★すったもんだのあげくついに町がひとつとなりました。一つの屋久島、みんなで大切にしていければいいですね。(い)  
★因果関係がはっきりしないのに、なんとなく雰囲気で納得してしまう、信じてしまうというのは大いに問題ありだと強く思う今日この頃。そこで来期はエセ科学撲滅を推進し、「スピリチュアルいじり」を実行しようと思います。はい、私イジワルです。(お)  
★9年間ありがとうございました。YNACで皆様と過ごした楽しい思い出を大切に、今度は屋久島のすばらしさを我が子に伝えていきたいと思っています。(さ)  
★もうすぐ帰国です。屋久島の緑が恋しいなあ。。。。(お)  
★いよいよ私も三十路代へ突入...、より味のある柔軟な人間になりたいです(ひ)  
★今年からシーカヤックツアーデビューです。大海原を手漕ぎボートで突き進んでいく爽快感はやみつきになります。手漕ぎで日本一周も夢じゃない!(た)  
★わが身を覆う親の庇が無くなりました。その上でいまだ一人身とは、とんだ親不孝者ですね。(か)  
★来年は年齢的に節目の年。悩み多き年頃です(は)  
★育休も終え、この度子連れで職場復帰致しました。息子共々宜しくお願いします。(こ)  
★YNAC 通信読者の皆様、YNAC の皆様、半年間お世話になりました。ありがとうございました。(ふ)  
★新編集長です。どなたか、原稿が早く集まるコツを教えてください...それはさておき、結婚を機にお引越ししました。新居には、夢の五右衛門風呂(要修理)が！やった~!(う)

## YNAC 通信(ワイナックつうしん) NO.24

発行日: 2007年11月1日

発行: (有)屋久島野外活動総合センター

住所: 〒891-4205 鹿児島県熊毛郡屋久島町官之浦 368-21

TEL: 0997-42-0944 FAX: 0997-42-0945

E-mail: [forest@ynac.com](mailto:forest@ynac.com) URL: <http://www.ynac.com>